



十三題

山茶花

蘇州廣濟堂

山茶花や信責の砂れ持こほし 壺天

山茶花や百姓弓の強れき 蛙所

山茶花や敬てい異く法の色 揚卷

山茶花やむしれ海鏡小葉垣 市胡

山茶花やいほき列條の茶友達 其香

山茶花や日御と源氏よ水并 花亭

山茶花とあそびてや茶花替古 以ね

時雨

あはれゆくは虚も實も時雨のれ 月景

香は火よよとあはれぬの時雨のれ 松花

志帆片帆志くはよきや人も空 秋霜

ゆくもと原よ捨よやまのれ 冬羽

早秋

川の眼れは先て時雨のさうつ 青雨

粒き川や茶湯よ志く 初時雨 吟素

よれ平小新の山さそや初志く 芦花

初時雨いつと柳の風れ 水花

残る名を卦引しては時雨のれ 以文

初雲と後よめてく 楚流

初燈尔志く 文眠

時雨は舟や文字指れ 松舟

日の輝より山きては 松客

うす曇れ懐紙志ありし初時雨 信女
 能化待孫のきよめや和志く小 文松
 時雨ちよまれゆるや片日事 元女
 志くくや懐紙おめても舟志あり 川至
 志く終や笑くかれ出する曇衣 巴三
 待鳴や雲も挿本よ初く流 風子
 一時由ま向て宿ハ念佛うれ 一葉
 時雨や難波の堀に海の音 左琴

着替してくまま終や初時雨 可笑
 終れ喜おくあまら時雨うれ 如蘭
 志く終や竹よハ家もねりき 花陸
 あくれ系にま終きあまら時雨お 仙氏
 免くる日のま向ハ朝の時雨うれ 浦夕
 看終れ深う標本よ時雨終る 其友
 後の隈ハ床のく終や落位髭 佐明
 跡まで後ちくくやを山志く終 因古

口切や白ハむく此は白く流水

ふ鳥

近江路や旅路ハ雲間に鳴き鳥 仙呂
枝先や貝くく散りて鳴き鳥 冬扇
唇むとぬきよ吹せ千鳥うれ 遊石
臨と遊み亭やふきれ波うす秋 其池
是上のそ臨捨ふふ鳥うれ 畦町
次千鳥養取鳴知は耳の底 以文

瘡の音やうねもまうて啼き鳥 江楓
ふ秋よ雲も散せり啼き鳥 茅江
舟あハ心よかくれて千鳥うれ 来止
旅の宿ねも悪く一軒あそり 縁岡
け海れをていつくそ友千鳥 曙山
あそり啼き鳥うせり一長廊下 契敬
何のまう遊へて折も友ふ鳥 文賀

麦苗

まきんや 白鳥よ 鳥羽 仔細糸 宮崎 市仙

櫓

櫓焼やうし世も移る 難波浮 陽水

櫓焼やこ子人の 香けしり 直由

あちちあやむしあうれ 山の櫓 梅水

野と山の 陰云たぐや 櫓れ 救 江楓

里 俊志うて 岬の 櫓火くれ 其道

櫓焼や猿も 狐も 忘のあ 吉田 雨睡

櫓焼やうし宵れ 宿ハ 雲れ 穴 以松

櫓焼て 絵師ハ 純漢の 工丈 芥 ち花

櫓の 大とこく 以て 川や 石の 蔓 文松

友多社のぬし

波せの羽の 遠音れ 白鳥

あつよし 竹の

櫓の 火や 夏よ 暮る 人 夢の 神 風付

四季子

源氏 絵と 野ハ ちの けり ちの 葉 橘 風葉

梅ひうり里かゝり物たりるさまはし
 雪中
 人の日やとり傳のさまさくなく音
 去雨
 七種をとくしてはむやかくし歌
 松舟
 梅り音や候風よきくむ山の池
 不流
 一月ハ化と内なり 梅の意
 雪中
 傘一川通ふ山路や去れ雨
 六洞
 客れ神引らうくくを去のぬ
 松花
 去雨や聲にけりくくくんの影
 不一

梅北
 去雨よ初ふ中房れ思や去れ雨
 梅北
 雪中 客れ日御の急座形
 直由
 うくくくく流しかけらる川端
 其能
 客れ月もせよ解れ氷くれ
 去曉
 芽柳や衣れ初この去り歌
 亭し
 縮一重本綿一重れ木の芽か
 相江
 舟舟や一重はく着てハ重衣
 汀鷗
 目れ板よ坂の付まを去りぬ
 杜支

青麦や海なれた圃の船あけ 呂舟
 片んくや淀の車れかとおも 宇桂
 駒多よ先こころけり終麻山 馬中
 船子啼や鳥毛のみ色小松原 六合
 いとゆふはけり物さしてや浩火れ婦 壺天
 一体の比枝のそ川柳う那 仙呂
 遠出んらかまへや 唱うり 共寄
 日の御も物んくうはけり 山松 題石

散花と吹いてハ唱 蛙う那 漢文
 多底や 櫻 日曇れ 燈い舟 芦雅
 苗代や 守新よも武家のかう将 文五
 別れもよみトーする 友見外 芦雅
 体と場よゆえるや ちれ茶摘 笠 蛙町
 紅裏も月さうぬくうり 言れ 九歌

卯れ花や 登よ 塗 續 文 杖 裏 楚 沈

掛簾も戸のぬくぬくはくまに 山代 百川

青梅れ落く秋もけり 其池

新うねハハるるのせうたくれ 文葛

旅人の級と見えぬのちりか 右産

りんきんお蛙やこへて飛けり 百川

玉糸留れ眉よ煤を墨と介 指泉

月影の日車よりうしろ 楓 松客

夕立や乃もまきくの牛け 暹石

五月雨や日積り借る人の指 漢文

子乙女ハ二人猿橋の目けき 禹扇

五月雨や仁義とらるる 吟素

五月雨や廊下社事 文五

松よふれをこれ付来や富士借 文眠

あたるも富士よけむや五月雨 水花

新窓やらんく 風林

車よ水も石垣の志風 風葉

梅の雨はうね枝は戸も青衣紙 亭々
と来てはなれぬはよの世は清水 五

初秋中葉は煙き 板も 奴水

多秋中葉は煙き 板も 南喬

目よ見えぬ秋は 桐の一葉は 松雨

胡きくち見ゆれば 茶や秋のむ 東阿

穂よきやち 柳の葉は 市朝

關如波中葉は 功徳と塵て 九款

白秋中葉は 月や 露のむ 青雨

何白一 露は あり 暁の月 暁由

十六宵よ 露は 鳥の形 風律

身は 暁は 文車並や 暁の月 暁容

暁は 暁は 暁も 一しや 暁の月 青雨

松雲中葉は 暁は 暁の月 暁容

松は 暁は 暁の月 暁容

日くくや秋たのこ宵分の音 其能
拾ひ木と待ひるや暮れ秋 東雄

く川さりと風をこけおぬれ 梅北

水もや暮れ冷ふてり橋おろし 其三

遠りあよねの暮色の空をけり 其三

薄氷中まきぬの風の秋は 六合

鴨啼て 氷も枯れは迎えぬ 桐江

夜雨やまよふも葉と体へけり 菖丸

夜念佛の籠やまよふれ双り 全

藤原実成連中

猫の毛は秋篠の日もや冬牡丹 文相

草百も時雨く松の雲う那 李潤

秋とり川堰のまきや初時雨 二竹

木葉葉子のまきせは秋は時雨か 氏安

波音をねよ細て啼ふも 力羽

管を縁は風や言條の小夜樹 芦舟

新波は中十三年今に鳴る鳥 文江

庵の戸は明てや高きと堂牡丹 明洞

年待やあくるし、雀又吹納也 鹿州大竹 芦橋

高津野の翁十三面忌追福

哥仙表

一列日原連中

口切よくよれ施奇や茶臼山 蝶鼓

夏八十夜よ吹中よの花 梨羊

汝焼のけしひと顔も煙揚きて 洪水

市てふい日れ市のやうなり 蝶鼓

夕月の陰冷くと縁すくも 風外

舌も添よとくひやく織あ 報卜

全

不捨のよも丸丸くくろ十夜水 愚守

まねのねもまのねは 黒人

断道ハ若徒よ膝とくろり合て 女呼

氣もかきくたるふれき露の 鼓凡

芥のてさくぬ月の待もこ 玉泉

和漢の意と今丁の文 不通

竹魚

鼓句

竹ハ墨筆はきく一草の凡 梨羊

埋もぬ唐を中塚の綿とも 愚守

口切や梅よ海福の字又まの 鼓凡

移るぬ名れきもかやくま牡丹 法有

仏人の花れきいやほこの昔 凡外

雲れよハまこ一舞や初時由 玉泉

風の待ぬけの雲や明れ松 愚人

あまらねきも衾の冬を籠 鼓ト

夕暮より移ぬま向や茶あも花曇 不通

空ハまこ船にま引や初時由 鶴堂

綿ちねきもや母女のらこ初 友呼

投入の糸茎もきく石棠れむ 蝶鼓

あひま白よ
うりきりて
石州津和野

今よ名の若木れ花や清くのも 月派

水堂流るんてあはれ福れま 全

風中ひきも吹きさる海の名 全

防州山口連中

哉時雨の馬木もあまき 松の庭 恭律

れよせまた理火の奥 三三柳

掃階さくかりうよるも人馴て 蝶夢

風うたふれはあし海 哥石

昔ゆよ二百十日れ月の冷 卯三

まこ 雲をうね柔れ枯 露夕

極先のお琴も袂の及こし 子さ

さや 悠くさした夕合れ下 木光

馬士よ年尔美定能不破の關 市朝

流泥の袋と入しゆとら 一色

ほろくきく雲の帆なる松花露
路吉
私物やうふ朝の雨雲
楚川
雪の舞る花のハハの針は
文可
只詰も細き大根盤人
哥哲
月代よきことつら行夜
あ夕
席敷の日をよみか
あ夕
このまゝまのたのしみ
奇石
まよぬくことれ能く知来風
鶴友

下畧

新巻これより青一太根引
鶴友
老楽の標の藤えや冬牡丹
奇石
堀也て眠るや摺のけし
あ夕
風や松も清濁のり
あ夕
所中よ松吹紅や十松寺
妙之
ここ及よ松花根や冬牡丹
一巻

風も塵と吹日や一尋登所 市胡
麦草や一先絶さひ知片松の風 路杏
風中かゝぬ松の二かい半 楚川
麦草中料子縁何う来男力 ころ哲
時中かゝぬ松の二かい半 楚川
曠の媽う戸とりちろりか 文可

追善

首尾

長州赤回連中

又月赤回中は夏を小松 湯 藤 松
八五九花も常盤何れ松の
車後、糸の目やよりの足へ
風よ常此か松すて石
馬ころんて足跡ハる備存の物
竹葉の産きといふか松を

花房ふけて桔梗よ深かくと 勿用

日よ流る紅の奥に神垣、

縁空一秋の間よ何ん恨るき 拵

人目此実もゆりせ 面腹、

ちよりも茶ハら山らうと庵のむ 用

二年く董 心ふれ 寧、

小祥忌

浄茶たりにぬくりの影中塚のお 落拵

大祥忌

春を渡りやまご哀をこれ冬 拵

遠波忌

竹篋の故と傷むや 暮の胡、

先師に付せく病かど時雨の晴も
は葉の雲よとふれ 志よ十一と田の
縁とゆりせりなごこあなうた 拵れ
世をく 拵和歌の浦波をかり拵へき
風空も正道の拵へは 踏まうやう
ぬくはのまら 何路教へまぬ 門寄も

そと吾徳の上りたそと子威の徳はよ
あつひ朝よ暮よと教ふやむ時か
き呼ばるるや交のあつたよまの又
けひつーにかうりまうぬおすくー
富よ 精進とてまうりまうり古きと
新ふるまうり

豊前小倉連中

ふされーに勝ぬ柴火や小舟河内 素尾

千尋石智新庵の張付

汝先のやぬ川は流はきこ

せうとそとつふのかく候

あま若御候とまへに母の月

ぬきふ白心と臨く新蕎麦

小倉連中

其徳の徳をきくー 大十

け水れ流氷小川の氣色うれ 柳枝

關所のあつひよまてや小まきる 居格

流ぬまもあつたは河内や難波浮 竹葉言

附巾や松系火吹て流す月 冠月

浴よまはるるや小まきれ白氷 今古

著てこれ塔の松葉や初時雨 卜才

晴の宵露皓の夜火や小秋時夜 桐尾

鳴鳴るや時雨よ傘も如し 素尾

くつくり我縁解の志く秋非

木枯よ海帯を結来れ馬ふれ

力石清れ去ふや花との花

山茶花や冬雪衣の泣く涙

柳の葉皆よ次秋夜の十夜非

縦横よ清い糸川ふ雪か

庭ハゆき世の樽れ酒のうり 舎佐

時雨や秋も交りて竜田川

高は野の三羽十三回云
白首尾此吟 小倉

海山のまや時雨の圓白瘡 杜岡

籠の菴よ枯のこ秋菊 嵐音

風冷れ秋よ空物う白ハせく 峯令

層茶よりハ影あまけく 京河

白壁此林より居た 暮此月 園州

川ても隙の茶山子樹き 度云

秋奈近き嵐のま地ら〜 蘭階

在所の又よ浩よ葉花 音籠

後採の船合雪うとま云 右丸

本川筋此より愛氣散一 青候

東迎の雲に舞へて暮此に 加ト

あ〜め〜〜た 文意此書 杜周

十三歌

浅芽生れ道 露連々る茶此を 加ト

秋長よ 露干と 告れ 夕暮の 嵐香

茶の海通ふま向や けり子音 我冷

けり 露も 耳よ けね 千鳥か 其一

白く 暮れ 時由や 法の 車 乃 十舟

朝経の緒を刺きや納豆汁 玄奴

十三年夢の上絵やひく時雨 文芸

同来てや流むも夢れあふる 夜玄

山菜花や香れき厚りのぬき石 系州

清ぬるりと流きてぬれ楳大木 柳好

願伽の井に流續きやる菜花花 山菜小

麦薺れぬも時たふしや撮ゆり 菊階

夢をけて唐唐く新けぬるれ 菊守

世よなきふるや十秋の志如き 流蓋

山菜花や白う赤うと小枝あ 斗巴

月花の香よ照れぬ中初時由 言多

はあけや風流富きてる牡丹 青候

口切や焙煎香の浅路下地忘 忌水

納豆とききくも時れ証鼓るれ 右左

ぬき上り風や片うめらり 青龍

子守の雨や散見れ文字観 園海

隣ありかあはるかに梅の花
とく梅丈園と名付ありし時の
唯今今更なりしを一言と傳ふ

そと大徳達中

孤あはれも後れ弱ハもたれむ 有隣

答む後あり浅芽生れる葉 柏庭

言ひそく先れ色れ人こえて 如風

鳥うあはぬう今れ志とて 一路音

目と物初あし山私動くゆも 一固

居長のと葉れそとふ砂 吐ト

ふ花は其るは戯はれぬさう酒 我山

さ水司も世のハ色 坂 巴谷

婦君よ一草 鳥よとく 呂竹

雲れせしゆのみも雷れけし 利睡

大少りの舞は湖の歌あり 千葉

ゆねとくとも 海を空 得之

経香れ葉の答とや水は花 千葉

流

繪よ在すも昔よ似たり胡酒を 我山

月とそくやうる香れ候はきく 如風

白よ海より一とまや冬の間 居瑜

茶よ沸きて冬日れ繩の付具候を 一圓

香は舟の空にたむすくや香あり 路香

舌より消我まのじり人 吐ト

時雨人と鳥の啼くはく日 呂竹

尾よきく一有日れ奥ハ冬に床 柏危

くまきくは風の鈴鈴の時雨声 利懸

鳥啼やけ日志のぬれ枯とゆり 巴谷

おとりり冬色に麻のふりゆり 得之

山茶の花や尾上を的の香の末 小舎 呂翠

風や暮るよ志とせくる此耳 今井津

香花の香やハ昔れ大に候 卜風

吹拂ふ花や 庭や 戸んたう花 田川 芳命

去のふれ夢よ幾代のさす牡丹 万水

さすふ推田

柳晴や波間とすくは雲れ標

さす田得傍

利身れ庭をそ定し波の吹 指月

豊前仲津連中

梅よ今日於時雨よふ之れ流 池文

千那れ社と照るは茶の花 古井

ま切も朱旋のふよ夕焼て 氣通

あの肥やうよふ別いふ 危路

萩のふれ斬和く月の秋 呂桂

腰折流て年首、細流 和永

ま山あうの礎よ障も盛し雲 芦九

星よとまてくまれ嬉しき 喜海

青丹より明あは何所の山も福ん 等我

晒の雪とまてくまれと 千川

赤雲のふれいさんうぬあひは士 兵志

あは浮きも二八十七 利友

三十五

風引もきくぬ 瓢の標よて 志也

清く糸の後此用心 世友

きくぬよ糸一きくぬの下屋浦 志也

^{カウラ} きてきくぬ一きくぬ指 志也

きくぬ世と根くぬの花の唱して 魯相

彼家志ぬ 唐亭子 符子 符折

下田口

飛うきも 伝やき津北又みき 魯相

吹流も 雪月此伝たるみき 嵐通

まこちきぬ日とささし物伝 志也

池田炭積松くせや 友千尋 和氷

雪月と伝は 伝千尋 白吟

雪ひそ山星れ 伝千尋 志也

雪波は中きくぬ 志伝心友 志也

雪波の一転よ 志伝心友 志也

兼波は中今も浮世と啼島 孤樂

カミ後言田建中

菴よ新の水鏡夕舟 古清

唐雲と山北と名よはくろふて 五友

けしゆ終ると手に籠むる 以貴

猫の目北里に籠るふ料即の百 三紀

あゝよ砂の志ありとくはく 辰水

まてれ男あも彼世の志吹ぬ 今路

辰の夢れ志の心はとく 楓雪

先師の十二回と市中名その
まゝ日に一句さけけり

豊後赤根

せりかへり侍やとく流の海を流す 故扇

豊後真玉

風の目や菴 絶の夕まじり 花牛

まてる忘や 風呂前終り 先 巡古

まてる守や せれ終のおひり 一年

奥山よ 藤の流る心 時雨う 月戸

出て遠入るや 辰よ 冬牡丹 馬井

山茶花中 顔ありと 終り 是如 経宣 古岩

三日の春むうこれまど時雨富永 虎角

山茶花やま〜湯の舞ひ咲 孤葉

草のまふれ草もく凡喜れ時雨カ

尾よほあ〜様の望〜や大根引 今臨

心さ〜とさ〜して細豆汁 以呂

山茶花やと〜年草〜ら此流ひ野 花拵

茶々下時雨川端のら〜り〜れ 古清

日此御とか〜る揚てや冬牡丹 三瓶

波の〜とお〜して鳴や小秋鳥 辰水

ま〜ん忘やゆり〜免〜草の表 吾友

風のまふれ〜家御中や初時雨是後クス 古桂

田中新〜家〜ゆり法カ標イ

山茶花や御食移り〜此儿

又〜れ〜片まふれ浪の友子香

風に起ま〜並飛下〜や細豆汁

ま〜ん忘や舟〜も〜は〜杖

楷林て庭ハぬりー百壽書 古桂

園守のあらび浅みやん根引

口切や其もれ根の雲かこり

袴の言れ胡懐や石蘭のむ

麦海や根うねるまの素足根

貸してやれ傘定めた十夜小 利鎌

風いふ寝籠のま裏れは牡丹

琴と松二人世帯の雨由う那 鯉木

風やねよ集於神の後

追記

花よ集れけ十月れ夜香草

白中よ三日月とひきて
五月て海の雲とまひり

正月

空をや三日月桂の白はもれ 馬貞
行

二月

三日月や清ていもわの言佛

二月

汐干出の神巻とわ紙有れ梅馬貞

四月

之日月の妙のむ故と昔のむ

五月

おとさの射りあきけと是の

六月

其の思違よや響く入る月

七月

けり居れ一と二と三と月日れ教

壬七月

之日月の中一切毫の枝あり

八月

義兵ハ多て帰る之月此月

九月

之月此教入るや輝りてお祭り

十月

二日 月 下 に 決 け り 志 の 証 馬 貞

十一月

眉 高 下 馬 也 晴 々 二 日 北 入

十二月

二 日 月 也 年 北 尾 上 の 方 色 一

あつと一糸のゆきまの二日亡はあつと
冊の二羽十三回忌の体より
あつと市中を庵さくより
それの省難も冥まかりと古

白の表と吐く
まのたの

二 日 の 新 ぬ き 一 日 白 花 杜 丹 古 桂

冬 も 序 後 の 雪 に 羽 打 じ

掉 さ け 長 き 影 一 日 無 かり て

一 村 雲 け 何 亦 よ ち り っ せん

月 一 日 氣 色 の 智 々 山 家

心 も 顔 も 一 日 我 一 日 登



